



先端がややとがった形をしている相馬土垂

伝統野菜の里芋

相馬地方で栽培が盛んだった里芋「相馬土垂」を復活させる取り組みに、相馬市の農業菊地将兵さん(30)が挑戦している。相馬の伝統を受け継いだ農作物を地域ブランドとして育てることで、「若者が相馬で農業をするきっかけを作りたい」と意気込んでいる。

相馬土垂 復活に挑む

若手農家 地域ブランド育てる

相馬地方はもとも里芋栽培が盛んな地域で、相馬市坪田の八幡神社では毎年秋の例大祭で「いもずいも」と呼ばれる里芋の吸い物が提供されるなど、地元の食文化にも根付いている。群馬県などで農業を学んでいた菊地さんは東日本大震災の後の2011年5月、出身地の同市へ戻り、畑作を始めた。農業を盛んにするために売りになる農作物を作ろうと注目したの



長男と一緒に相馬土垂を収穫する菊地さん(相馬市で)

が、昔から育てられてきた「伝統野菜」だった。県などに問い合わせ、相馬地方には「相馬土垂」という里芋があったことを知ったという。1931年から続く種苗店を相馬市中野で営む佐々木善幸さん(69)によると、相馬土垂はラッキョウのよう

に先端がややとがった形で、粘りが強いのが特徴。20年ほど前までは種芋を農家へ卸していたが、農家の要が減っていったとみられる。菊地さんは風評にも負けない地元の特産を求め、帰郷直後から相馬ならではの野菜を探した。唯一の伝統野菜として相馬土垂の存在を知り、種芋を求めて関係者や知人、種苗店などを訪ね回った。ただ、地元の人

が、昔から育てられてきた「伝統野菜」だった。県などに問い合わせ、相馬地方には「相馬土垂」という里芋があったことを知ったという。1931年から続く種苗店を相馬市中野で営む佐々木善幸さん(69)によると、相馬土垂はラッキョウのよう

幻の相馬土垂を探していた菊地さんは昨春秋、新地町の農作物直売所で似た形をした里芋を見つけた。それを知り合いの農家に確認してもらい、相馬土垂とわかったという。自家用で現在も栽培している、相馬市今田のイチゴ農家太田俊一さん(61)は「煮崩れしやすいがもちもちしていて、煮つ転がしや豚汁にして食べる」と話す。

得た。今年5月、仲間と土垂を植え初収穫を迎えた。芋煮会も開き、参加者が土垂を味わった。収穫に参加した食材付き季刊情報誌「そうま食べる通信」の共同編集長で漁師の菊地基文さん(40)は「関東からも参加があったのは期待の表れ。食べる通信でもしっかり取り上げ、多くの人に土垂を知ってほしい」と話した。将兵さんは相馬土垂を地元の旅館で扱ってもらうほか、生産グループをつくり、流通も視野に入れる。土産品として定着すれば地域経済の振興にもつながる。忘れられた伝統野菜をもう一度、根付かせる。展望は広がる一方だ。(谷口隆治)



伝統野菜 復活の一步

サトイモ在来種 相馬土垂を収穫

相馬市塚部の畑で6日、相馬地方でかつて栽培され、途絶えかけていたサトイモの在来種「相馬土垂」が収穫された。復活の仕掛け人は原発事故後に帰郷し、就農した同市の菊地将兵さん(30)。「やっ」とこ



収穫された相馬土垂。市販のサトイモより縦長の形が特徴

まで来た」。相馬土垂を前に、菊地さんは感慨深げだ。地元の関係者のほか、インターネットで情報を知った関東圏の有志など約30人が集まり、相馬土垂を掘った。有機栽培した自慢の野菜に付加価値を求め、地元ならではの農産物を探し歩いて5年。菊地さんは「諦めかけたけれど、やって良かった」と笑う。相馬土垂は昭和40〜50年代に一部の農家で栽培された。現在のサトイモより強い粘り気が特徴。ラッキョウのような縦長の形で、皮のむきづらさから次第に需

要が減っていったとみられる。菊地さんは風評にも負けない地元の特産を求め、帰郷直後から相馬ならではの野菜を探した。唯一の伝統野菜として相馬土垂の存在を知り、種芋を求めて関係者や知人、種苗店などを訪ね回った。ただ、地元の人

に先端がややとがった形で、粘りが強いのが特徴。20年ほど前までは種芋を農家へ卸していたが、農家の要が減っていったとみられる。菊地さんは風評にも負けない地元の特産を求め、帰郷直後から相馬ならではの野菜を探した。唯一の伝統野菜として相馬土垂の存在を知り、種芋を求めて関係者や知人、種苗店などを訪ね回った。ただ、地元の人